流通科学大学　高等教育推進センター紀要　第 6 号，1-19（2021）

「ゆるく」つながりたがる大学生の論理的思考力の改善方法

― ソーシャル・メディアからのヒント―

A Practical Training to become a Critical Thinker

― Some Implications from SNS ―

来栖 正利*

Masatoshi Kurusu

200 字を手始めとした文章作成の反復練習を通じて、論理的に思考する力を改善する教育の有効性を本稿は提唱する。これを、ソーシャル・メディア(SNS: Social Networking Service)を活用し自身のキャリア形成を成就してきた経歴を述べたウイッカー(2020)を紹介しながら、行う。短文作成を主体にした自己 PR ツールである SNS の機能と役割に注目し、学生の論理的に思考する能力改善に活用する訓練方法をいくつか例示する。

キーワード ： 内向型人間、論理的に思考する力、200 字による文章表現の型

Ⅰ．はじめに

200 字を手始めとした文章作成の反復練習を通じて、論理的に思考する力を改善する教育の有効性を述べることが本稿の目的である。これを、ソーシャル･メディア(SNS: Social Networking Service)を活用し自身のキャリア形成の足跡を述べたウイッカー(2020)を紹介しながら、行う [1)]。これによって、自己紹介や日常生活等の経歴を短文にまとめ公開する実践例が、SNS を日常生活の一部と考える大学生の能力開発（教育）を考える上で、有益であることが理解できるだろう。

大学卒業後、誰もが何らかの職務に就いて生活の糧を得る。そうであるにも関わらず、就職活動のための自己分析にとどまらない人生設計を描く機会を大学が提供すべきなのか否かということを含む、この課題に関する議論を殆ど耳にしない。大学教育への導入として新入生教育と称する諸科目がこれを少なからず担い、かつ実学教育を競うように謳う一方、職業訓練校への業態転換と誤解されることへの嫌悪や危惧がこの議論の深化を遠ざけているのかもしれない。

他方、低い学力水準や稀薄な向上心という大学生の実態改善を志向する教育を模索し続けるだけの大学教育に抜本策を求めない世論は大学教育を辛辣に批判するだけで、それに見切りをつけ「我が道を行く」ことを断行するわけではない。この「ぬるま湯」体質と揶揄される現状は一度

*流通科学大学商学部、〒651－2188 神戸市西区学園西町３－１

（2020 年 11 月 17 日受理）

©2021 Center for Promotion of Higher Education

しかない人生を有意義に過ごす術を生涯教育として大学が提供すべきなのか否かという、新たな教育問題の現出に気づかぬ世間とそれを敢えて問わない大学機関の思考停止状態を暗示する。

学力水準と向学心の低さの改善に最善を尽くさない大学生に、それを痛感させ、研鑽する機会を提供しないまま卒業させる大学教育と、そのような人材を受容する世間の寛容さを悲観的に考える筆者（来栖）は当該問題を氷解させる機会を学生が自問自答する自己対峙の場として 200 字を手始めとする文章作成の反復練習に期待する。この反復練習の訓練実施が大学生の論理的思考力の形成・強化と自分自身のために学ぶべき教育内容を的確に選択する能力開発に役立つと考える。

上述の問題意識に基づく本稿は次の構成からなる。まず、ウイッカー(2020)の要約を行う(II-1～3)。日本の雇用・労働環境が米国のそれに早晩追従するだろうという本稿の推測に基づいて、ウイッカー(2020)の全章を要約する。これによって、SNS の活用が内向型人間(後述)の「強み」を活かす最適な手段になる可能性があること、および、短文表現による安易な「自己 PR」が内包する諸問題の一端を提示し、これらを読者と共有したい。

次に、SNS を通じた短文表現の適切な「自己 PR」が人生の飛躍的な改善を導く可能性があると述べたウイッカー(2020)を踏まえ、日々見聞している大学生気質の「土台」が高校教育によって固められるという本稿の認識に基づいて、高校教育における国語教育の考察を行った秦(2014a)を織り交ぜ、大学生気質を記述する(III-1・2)[2]。SNS を駆使して私生活を楽しむ 10 代の若者と「高校生」とのギャップに注目し、高校生の国語力改善の実践とその含意を秦(2014a)は述べている。

そして、学生の論理的に思考する能力の改善策を提案する(III-3-a～c)。在校生に課すレポート課題の在り方に着目し、この実質的な教育効果をさらに改善できる余地があることを指摘する。そして、この改善手段として 200 字文章の作成の反復練習という訓練機会の設定を提唱する。そのさい、この短文に、何を、どの程度(分量)、どのように(構成)執筆するのかといった問題に対する私見として出題例を提示し詳説する。最後に、内容を総括し、本稿を終えることにする。

II. 武器としてのネットワーク構築 [3]

１.「ゆるい」つながり

キャリアを積み上げていくならば、ネットワークの拡充が有用である [4]。そのさい理解しておくべきことが二つある。(1)予め壮大な人生計画が用意され、それを絵に描いたように実現できた成功物語が、皆無ではないにせよ、稀だということ、(2)誰もがうらやむ経歴でさえ、様々なネットワークの行き当たりばったりの「つぎはぎ」だということである。そこで、人生の岐路に差し掛かったときに頼りになるのは、意外にも、社内外の「ゆるい」ネットワークなのである。

とりわけ、社内の「肩の凝らない」ネットワークを常に「アイドリング」状態にしておくことは、充実感と安心感溢れる人生を過ごすために役に立つ。これは内向型と称する性格をもつ人間であることの方がコミュニケーション・スキルを無理なく発揮し易いこと、またこの性格故に、SNS を駆使することが内向型人間の秘めた力を開花させ、そのことによって自分の人生を力強く

切り拓いていくことができる原動力にできるのである(「はじめに」)。

社交性を発揮して自ら動機づける性格を外向型人間、他方、第三者の目線に立ち状況判断に優れた観察眼を駆使して内発的に動機づける性格を内向型人間と定義づける。この内発的動機を喚起するには内省する時間を確保することが肝要である。この確保によって、まだ気づいていない潜在能力を、その開花を阻む各種障害をしなやかに避けながら、自らの手で思い通りに引き出すことができる。そのさい重要なことは、話の口火を切る好奇心旺盛な観察者の立場に徹し、情報分析に専念することである(第 1 章)。

しかしながら、このコミュニケーションは利己心に基づくそれを意味しない。「マイクロ雇用」またはギグ・エコノミーが新たなワーク・スタイルとして普及し始めていることが、これまで以上に濃淡かつ多種多様なネットワークが生まれていることを如実に物語る [5]。このような中で、「弱い絆」と称するネットワークに洗練させていくために必要なことは、つながっている人々が「意義ある会話」を双方が行うことである。なぜならば、利他の精神に則ったコミュニケーションを行うことが、結局、自らを利することになるからである(第 2 章)。

「弱い絆」または「ゆるい」ネットワークを戦略的に保持する目的は人間誰もが持つ無力さに起因する。タイミングが異なるものの、誰もが知らない誰かの助け(価値)を得ずに人生を過ごすことは、限りなく不可能に近い。この自明とも言えることを誰もが理解している一方、喫緊の課題解決のために、つまり、一方的な「利益」を得るために、「下心」見え見えに近づいてくることを誰もが嫌う。この現金な人間同士をつなぐネットワークの構築に必要なことは、それを利用する必要がない時も含めて、つながり続けることである。

そのさいに負担する「待機コスト」を賄ってなお余剰を生み出すには非同期型ツールを活用することである。ショートメール、検索エンジン、ダイレクト・メッセージ等はお互いを束縛しない。この時間拘束を強いることのない「ゆるい」ネットワークは、時空を超えた固い絆の関係を構築するまでに地道な努力と時間を要するものの、それによって育まれる親密さという価値を双方にもたらす。これは良き人間または良き隣人が苦労を厭わず、また、見返りを期待せず気を配る返報性の原理が成り立つ境地を意味する(第 3 章)。

一言で言えば、「ゆるい」ネットワークの価値は、異なる環境に身を置く第三者の価値観が提供する何か、つまり、セレンディピティ(serendipity)を期待できることだけに止まらない [6]。この価値がその時々の関心事項に基づいて拡充され続けていることを踏まえれば、「ゆるい」ネットワークはこれを保持・拡充してきた自分自身の生き様を反映する人的資本そのものである。これは雇用の流動性が相対的に高い労働環境および産業構造の中に身を置く人々が求め、改善し続けるスキルの更新履歴そのものである(第 4 章)。

２．公私混同の勧め

労働力を提供し、その対価として生活の糧を得るという従来の労働者と組織の関係が一変している。(a)「私」の価値観、(b)培ってきたスキル、そして(c)組織が求めるニーズ、これらの総計が「私」の人生に対する満足度を表すようになっている。同時に、組織が採用するにふさわしい人材を組織への貢献度によって決める人事制度の浸透は、公私の区別という従来の発想を稀薄にしている。その結果、SNS への個人の果敢な登場を促す状況を生み出している。

この現況をプライバシーの過度な侵害と批判し、その登場を躊躇することができる一方、その

ことが少なからず後悔を生むことになる。なぜならば、人柄を含めて相互理解を前提に、信頼・尊敬できるパートナーを同僚として迎えたいという昨今の価値観の浸透が、(a)個人の価値観と職業人の見解を SNS に載せることを厭わなくなっているという個人の懐の深さと(b)公私混同に対する社会の寛容さを生み出しているからである。

これは公の「顔」を見せることに固執する、その個人の姿勢に社会が信頼を置かなくなっていることを示唆する。これに眉をひそめるのではなく、職業人の立場と個人の個性をブランディングし、その個人が持つ「奥行き」を社会に戦略的に魅せていくことが自らの社会的価値の改善に役立つのである。個人が SNS を活用する実質的な意味とその価値は、自ら策定した戦略にしたがって性格や個性の自己表現を行い、社会的信憑性を得、そしてその恩恵を享受することにある。

ただし、「策士策に溺れる」ことをしてはいけない。SNS を利活用し、社会的信憑性の程度を決定するブランディング問題(自己演出)は思慮深くアプローチすべきである。職業人生と個人の人生を公開する内容とその範囲のバランス、そしてこれらを社会と共有するために選択する手段(SNS の各種ツールと対面)の使い分け等、これらの利活用の程度と頻度を決めるのは、すべて自己責任なのである[7](第 5 章)。

とはいえ、オンライン・コミュニケーションを駆使できることは爆発的に増える人やビジネス・チャンスとの出会いをお膳立てする。リンクトイン、ツイッター、そしてインスタグラムに共通する、「知っている」だけの人間関係や非同調型ネットワークという特徴は、内向型人間の「強み」に沿った利活用を可能にする[8]。これは量が質を担保することを示唆する。ただし、質だけを追求できないため、必要/有用なものを的確に取捨選択できる能力を併せて改善する必要がある。

取捨選択能力の改善に要するコストを負担してもなお余りあるメリットは、求職者と雇用者とのつながりを支援するリンクトインを利用している時に、特に、実感できる。これはその時々の自分との対話とその歴史(更新履歴と入力内容等)をいつでも読み返すことができることである。初めて立ち上げた公開プロファイルを皮切りに、職業や仕事の「更新」毎に新たな人と情報との出会いがあり、その中から任意の「一つ」を信頼して選び、歩んだ人生が記録として残っている。

リンクトインが提供する価値ある自分史の主なスタイルを説明しておこう。求職者と雇用者との出会いの場であることを意識し、自己紹介欄をタイムリーに更新することが賢明である。例えば、セールス・ポイントや自己実現のために掲げた目標や今までの実績の表現を工夫することは閲覧者の興味を喚起するのに有効である。ただし、これらが容易にできることではないため、自己分析を注意深く丁寧に行うために時間を十分かけることは自分を理解するために有益である。

とはいえ、職歴を軸にしたプロファイルの作成が必要であることを勘案し、職歴を支えるボランティア活動、教育訓練受講歴、縁があって携わった仕事等の実体験や経験を適切に盛り込み、このプロファイルを閲覧している人が連絡したくなる程の魅力を伝える工夫をすべきなのである。この工夫にかける努力は割に合う。なお、自己 PR のための魅力的な表現方法が思いつかない時は、共通する関心事についてつぶやいているツイッターからヒントを得ることができる。

ニュースを読み、それに関する人々の賛否両論の議論やアイディアを得る手段として、つまり、閲覧専用としてツイッターを活用することは、内向型人間の性格を遺憾なく発揮してメリットを享受できることを意味する。報道されたニュースに対してリアルタイムで投稿できるショート・メッセージは、専門家が提供する詳細なコラムを凌駕する価値がある [9]。これはツイッターのユーザーを適切にグルーピングしたリストを作成することで倍増できる（第 6 章）[10]。

なお、SNS から一定の距離をとり、ロムラーでいることはチャンスを逃していることを意味する [11]。これは創造的かつ情緒豊かな交流といった心温まる温もりを、コンテンツという表面的な言葉に置き換えることで失う損失を遙かに上回る。例えば、(a)コンテンツの的確な選択能力を養う機会、(b)「私」を引き立ててくれる誰かに気づいてもらうという機会、そして(c)(b)の機会を適切に得るために、無理なく自己表現する方法を身につける機会である。

オフラインである実社会は相対的に有利で幅広な交流機会を外向型人間に提供する。他方、オンライン・コミュニケーションは、取捨選択能力とブランディング能力の改善が常に求められるものの、閲覧専門という立ち位置に固執しながら、自己表現を演出する機会を外向型人間だけではなく内向型人間にも提供する。そのさい、キャリア・職探し、専門スキルのブラッシュアップに着目するならば、SNS を通じて、自分自身の何を発信しているのかに注意を払う必要がある。

これは自分をブランディングするのは他ならぬ自分なのだということを意味する。SNS を通じて発信する自分の一挙手一投足が自分のブランド価値に影響を与える。これはショート・メッセージの文字表現や絵文字の選択も細心の注意を払うべきことを意味する [12]。というのは、意中ではない名前や投稿を、偶然、閲覧者が目をとめることがあるからだ。したがって、個人のプロファイルが意中の閲覧者のマイナス評価を得るようなものであってはならない。

前述はあなたのスキル、才能、そして価値を自分に合った方法で人々に知ってもらうことが、どれだけあなた自身の存在価値を実感するために重要なことかということでもある [13]。例えば、あなたの身近な人々をあなたが既に持っている重要なマーケティング・ツールと解釈できる。なぜならば、これらの人々があなたやあなたが提供した助言・返答に対する評価を既に下し、それがそのままあなたの（存在）価値、つまり、あなた自身のブランド価値を示しているからである。

したがって、自分自身のブランディングを行う際に重要かつ有用なことは三つである。(1)投稿し続けること、(2)そこから学び続けること、そして(3)学んだことを次の投稿に反映させ、向上し続けることである。「ゆるく」つながる SNS を通じて、名前を知っている人々や面識ある人々の中から、価値ある何かをあなたに提供してくれるのが誰なのかを熟知しているのは、あなた自身なのである。あなたが実感できるこれらの価値があなた自身のブランド価値なのである（第 7 章）。

なお、「私」のブランド価値の維持強化に最善な手段が E メールであることを実感している人は意外に少ない [14]。非同期型コミュニケーションを提供している E メールのオープン仕様は、尽きることのない文句・欠点を遙かに凌駕するメリットを提供している。ユーザー万人の要望を叶え、長年使用され続けているという紛れもないこれまでの実績がこれを実証している。ただし、E メ

ールはキー･パーソンとテンポ良く重要案件を解決する有効な手段とは必ずしも言えない。

第三者同士を引き合わせる仲介役を引き受け、E メールをコネクト手段として利用することは有効である。E メールはテンポ良く単刀直入に要件を述べるのではなく非同期型という強みを活用したコミュニケーションをしばらく楽しみ、第三者同士が馴染む場を演出する手段なのである。見知らぬ人の依頼を E メールで受けることを、仲介役を買って出る場合であっても、誰もが躊躇しがちである。厳選機能というネットワークの強みの賢明な活用がブランド価値向上に寄与する。

「ゆるい」ネットワークのさらなる維持強化に役立つ E メールの活用例は、フォローアップを意図した「ご参考までに」と称した情報を提供することである。意識して目先の利益を追うのではなく、受信者への思いやりや気持ちを E メールに託して示すのである。したがって、受信者との親密度に基づいて、E メールを通じて提供する情報と添えるメッセージの許容範囲が変わる。とはいえ基本は、親しき仲にも礼儀あり、ましてや親交が浅い人であればなおさらである（第 8 章）。

３．現実世界の楽しみ方

何らかの組織に所属する「構成員」である限り、チーム･プレイヤーであり続けることが、否が応でも、求められる。これは日常業務の遂行のみならず、オンサイト･イベントの参加であれ、自由参加と（名目上）謳っているオフサイトなそれであれ、基本的に同じである。参加必須の業務関連イベントは出席することに意義があると割り切って、義務を果たしながら参加するというモチベーションを維持するために、イベント終了解散後の「お楽しみ」を用意してから臨もう。

ただし、自由参加を謳うオフサイト･イベントが名ばかりなそれであることを誰もが熟知していながら、そこから誰も逃れられない理由は、それを義務と「だけ」考えるからである。そうではなく、日頃ビジネスライクにつきあっている同僚との交流に目を向け、日頃見せることが少ない「素顔」を見せ、業務遂行能力の改善を図る機会と解釈することをお勧めする。このような解釈は同僚を経由して利害が一致する社内外の人とつながる機会との解釈を可能にするだろう。

ただし、各種社内パーティーは、オフサイトであるが故に、難攻不落なイベントである。これに臨むに当たっての基本的なスタンスは、割に合わないと判断するイベント参加を避けるのではなく、チェック･ポイントを的確に押さえて無難に乗り切ることである。この戦略は参加「推奨」と銘打つイベントの攻略にも当てはまる。ただし、活用次第でメリットを最大限引き出すことができるので、参加者の「流れ」をかわしながら主体的かつ利己的に動くことが肝要である。

そのさい重宝するアイテムは、意外にも、名刺である。とりわけ業務関係のイベントで交換した名刺は、限られた開催時間内に挨拶した人々へのフォローアップを思い出させてくれる「記念品」と言える。これは挨拶相手に手渡すべき名刺のデザインが頼もしい戦力になる可能性を秘めていることを示唆する。一期一会たり得る出会いであったと記憶に残るデザインを施した名刺は、公私にわたって機会を拡げてくれる「一枚」になる可能性がある（第 9 章）。

名刺がもつ「御利益」に加えて雑談（small talk）のそれも述べておこう。とりわけ雑談は内向型

人間の理にかなっていることがある。それは雑談が緊張を和らげ、その場に居合わせる人々を和ませてくれるのである。これを「社交場の潤滑油」と呼ぶ[15]。しかも都合の良いことに、雑談はその内容をお互いの記憶に残りにくい極めて差し障りのない、取るに足らないものである一方、状況に応じて有効な「武器」として活用できる便利なコミュニケーション･ツールにもなる。

例えば、就職面接会場における志望者は、平常心を取り戻しかつ保持しながら、自分自身に内定通知を知らせるように面接官を説得しなければならない。そのさい、僅かに交わす雑談の中に熱意や興味を志望者は盛り込むことができる。ただし、志望者が雑談としての受け答えを面接官は、部下や同僚としてふさわしい業務遂行能力をもつ人物であるのか否かを含む、今までの生き様を凝縮している「人物像」を評価するために耳を傾けているということを忘れてはいけない。

他方、オフィスでデスクを並べる同僚との雑談はもう一つ別の効用がある。オンサイトであれオフサイトであれ、社内または業務関連のイベント参加を無難に乗り切る手段として活用できる。加えて、ほんの少し私生活を織り込んで雑談を交わすことは世代が異なる同僚や部下を適切に理解するのに役立ち、そこで新たな一面を見いだすことがある。雑談は取るに足らないものであり、不快に思わせられることがある一方、想定外のチャンスをもたらす可能性も秘めている（第 10 章）。

想定外のチャンスを引き出すために有意義な雑談を最善な求職活動を得るために活用すべきである。方法は二つある。(A)求人情報サイトや検索エンジンを駆使して魅力的な求人情報を見つけ、この掲載主である組織の経営分析や業界分析を行うことである。(B)当該組織の使命、社是、社風等を調べ、話題を豊富にしておくことである。これらは意外にも軽視されがちなことである。これらを注意深く把握し、希望する組織の一員としての自覚を自己評価してみることが重要である。

当該組織の一員になることの自覚を自問自答しても確証を得ることができない「不確実性」に対する対処方法は、就職を希望する組織に関係する人々とつながることを模索することである。例えば、当該組織に所属する人を介した求職活動は、そうでない場合よりも有意義な求職活動になるだろう。それ以上に有益なのは、当該組織を含む関連する業界で活躍する人々とのつながりを拡充することはキャリア・プランを明確にする有益なブレインストーミングになることである。

いわゆる業界人とのパイプを保持することは、各種求人サイトに掲載されない常勤/非常勤の求人情報を得る機会の確保にもなる。独立開業やフリーランスを考えている場合、長い目で人間関係を構築、保持することに努めれば、「瓢箪から駒」を地でいく機会を得るかもしれない。それほど、いつ訪れるとも分からぬ機会到来を鶴首し、「ゆるく」つながる関係をコツコツと積み上げ続けるには血のにじむような努力と気の遠くなるような時間が必要なのである（第 11 章）。

「風雪に耐えてきた」ネットワークだからこそ、人生の岐路に立つときにセーフティー･ネットになってくれる。性急な答えを求めず「急がば回れ」の精神で、コーヒー･デートに軽いフットワークで出かけてみれば必ず何かを得ることができる。「急いては事を仕損じる」のである。ネットワークを作り始めた駆け出しの「新人」は、ぽつぽつとつながり始めた人との情報交換や近況報告を語り合うことから始めてはどうだろうか。何事も「千里の道も一歩から」なのである。

これは「馬齢を重ね」たと思っている人ほど肝に銘じるべきである。年功序列の恩恵に与かってきた古参組と見なされれば、職場における存在感が劇的に陳腐化するのである。年齢を重ねたという紛れもない「事実」が、否が応でも「年齢差別」を思い知ることになり、これが自らを精神的に追い込むのである。したがって、今までに培ってきた「私」の経験と知識という絶対的な価値を武器に、いついかなる時も分別と警戒心と好奇心を発揮し、新たな機会に挑むべきである。

なお、一般的に社歴の浅い企業の方がこれからの貢献度といった可能性に関心が強いことを覚えておくべきである。とくに成長の波に乗った企業は従来型の業界でさまざまな恩恵を受けてきた人には向かない可能性がある。したがって、過去の実績への執着が強すぎて、新しい世界でもそれが通用すると自信に満ちていそうな人に、「成功する保証がない」と説得してきた。ディレンマを抱えながら自らを奮い立たせ続けるには頑強な精神力を要したのである。

自信やキャリアの有無とは無関係に、社歴の浅い成長の波に乗った「新しい世界」に飛び込もうとする人は「新しい世界」の「本質」を十分肝に銘じたうえで飛び込んでほしい。

「自分の期待(最初のうち、過去の実績があるから自分は自動的に出世できるものと思い込んでいた)と･･･現実との葛藤にあった。仕事を通しての学び、失敗も仕事のうちという会社の方針からは私も大きな恩恵を受けることができたが、仕事の要領を覚えながら『早い段階で失敗しておく』のは･･･若い人のほうが向いている」(p.292)のである。

もう一花咲かせるために、50 歳という年齢や人生経験をしなやかに活用することもぜひとも考えてみて欲しい。公私共々の長い人生は多彩なバックグラウンドをもつ人々とともに過ごした時間でもある。「ゆるい」つながりが活きるのは、50 歳を超えてから経験する公私にわたる「変化」をソフト･ランディングする時なのである。したがって、新しい活躍の場を得ることができたのであれば、メンターとして「昔取った杵柄」を活用してみることも新たなやりがいになる[16]。

幾多のチャンスを掴み、活かすことで織りなしてきた華麗なる人生は、予期せぬ「変化」の連続体と言っても過言ではない。どの段階の人生の岐路に立とうとも、「ゆるい」つながりにある人々と定期的にコンタクトし続けている限り、人生の岐路である「変化」は人生のゴールデンタイムの到来になる。オープン･マインドで新旧の知人の助けを糧に「自信格差」を物ともせず力強い一歩を踏み出すことができれば、「変化」は美徳、そして失敗は罪ではなくなる(第 12 章)[17]。

Ⅲ.「ゆるい」つながりを強固にする方法

１．現代学生気質

充実した職業人生を過ごし、一度しかない人生を有意義なものとするために、ウイッカーは SNS を戦略的に駆使することのメリットを自身の体験を軸にして詳説した。これがアメリカの事情であることやラインの存在を知らない可能性があることを割り引いても、ウイッカーから学び、そ

れらのいくつかを実践してみる価値があると筆者(来栖)は考えている。これに関する私見を述べる前に、ウイッカーが明確に述べていない、重要かつ有用なことを確認しておこう。

それは(1)人と人とを「ゆるく」かつ「細く長く」つながり続けることができている理由が何なのか、(2)その身につけ方と強化方法といったことである。これらは「信用」と「信頼」を構築、保持する方法でもあり、それを論理的に思考し「ぶれない」考えを簡潔明瞭に適切な言葉を用いて説明、記述できる能力が実現する。では、これをどのように行うのか。拙稿を読む読者が筆者に課された業務と共有している可能性が高いことを踏まえ、下記で私論を展開していこう。

次に、ウイッカー(2020)を読み終えカリキュラム開発に役立てることを考える場合、少なくとも二つのことを考える必要があるだろう。一つは、後述する学生気質を踏まえ、SNS を駆使した「自己 PR」の技法を学ぶ講義実習の設定である。例えば、操作方法、制作技法、関連法規(憲法・民法・知的財産法等)の習得に役立つ科目群である。そのさい、投稿内容の表現方法(画像掲載や言葉遣い)が閲覧者に与える影響を考慮するデザイン思考を習得することが必要である。

もう一つは、デザイン思考を追究するために、社会心理学、統計学、そして計量経済学を駆使してデータ収集に始まり効果測定ができる分析能力を養成することである。「自己 PR」を適切に閲覧者に伝えることに主眼を置いていることを踏まえ、論理的に思考する能力改善を最優先に考え、最適な「自己 PR」ができる言葉･表現方法を豊かにすることが有用である。この習熟を可能にする科目群の設定は閲覧者に与える影響を適切に制御するために極めて重要である。

ウイッカーの主張を本稿が取り上げた理由は内向型人間の性格を活かす術を述べており、これが現代の学生気質に沿っているとの判断に基づく。例えば、①自分の人生のことを含む何事にも関心を示さず固執せず、何事にも淡泊に対応する学生、②「本心」を理解するまでに時間を要し、ぽつりぽつりと語り出した「本心」が陳腐と思えるほど視野が狭く表面的であったりする学生、そして③平易な語彙を用いた堂々巡りの議論や分量や質が陳腐な文章表現に終始する学生である。

現代の学生像を述べた筆者の私見が的確ではない可能性があるものの、この是非をここでは論じない。なお①～③に示した学生像が相対的に劣った能力を指摘したそれらではないことを予め述べておく。そうではなく、学生の思考の開発および訓練が不足しているのであり、したがって、適切な指導を得る機会が乏しい児童･生徒時代を過ごしたのだろうと筆者は考えている。例えば、高校生の作文教育の実践例を論じた深谷(2001)を考察した秦(2014a)は次のように述べている[18)]。

「生徒たちは普段、活発に友だちと会話をしたりメールを交換したり･･･みずから発言者となり日記を公開したりもする。･･･ところが(授業や宿題で)与えられた課題や作文と向き合うと、途端に手は止まってしまう。･･･(生徒は)書くことを含めた言語表現活動全般に苦手意識や嫌悪感があるわけではなく、『自分たちの興味、普段着の表現』と、教室で求められる『論じるべき内容、よそ行きの表現』との差に苦しんで･･･(い) ･･･るように思えてくる」(p.126)[19)]。

２．分析

一人の生徒が見せる二つの「顔」を深谷(2001)と同様に観た秦(2014a)は、深谷(2001)の実践方法から何を読み取ったのか。深谷(2001)が設けたいくつかのルールのうち、『作文をさせるのではなく、事実をもとに創作をさせる(虚構を認める)』に注目し、秦(2014a)は次のように述べている。それは日常生活から題材を選ぶこととし、このルールを守るために周辺の人々を観察する姿勢を深谷(2001)は生徒に求めた。とはいえ、「虚構を認める」という文言を加えたことで、

「生徒は･･･正確に書かなければならないという作文の既成概念から脱したと考えられる。書き始めの意識が『正確に伝える』ではなく、クラスメイトを意識して『読んでもらう』ことであり、そのことが結局、自分の伝えたい内容が相手に分かるためにはどう書けばいいかという問題意識、文章表現への関心を持つことに繋がった」(p.128)。

上記の秦(2014a、p.128)は少なくとも次の三つのことを教えてくれる。(i)学生が提出する「白紙」レポートに対してコメントや点数をつけることができないということである。正確さや表現の稚拙さに目を向けず、何かをできる限り多くの字数で書いてくれないと、当該学生の考えを適切に理解することは言うまでもなく、書かれた「稚拙」な文章を読み込んで、該当および省略された言葉や表現方法を補って「稚拙な」文章を改善するための指導ができない。

(ii)学生が提出するレポートの「読者」はほとんど教員一人「だけ」である。この現状を変える工夫は考える価値があるということである。例えば、レポート用紙には学籍番号とペンネームを使用し、本名を使わない。学生に課すレポートの字数を減らす(詳細を後述する)。次に、履修学生を X 人の小グループに分け、教員への提出用とメンバーへの配布用のレポートを準備し、異なる「読者」を意識させる。そして、一定回数毎に「読者」を変える目的でグループ替えを行う。

(iii)文章表現の書き方を教えても「読者」を意識せずに書き終えた文章は自己完結してしまう。教員以外の第三者(他の履修者)から質問･感想等の指摘を受けることが皆無に近い状況は、本来ならば享受できる教育効果を教員が学生に提供していないことになる。レポートとして学生自身が書きたいと考えている内容をレポート作成時点で教員以外の読者を意識して考える必要がないことは、書く予定の内容の質や表現方法の工夫等ができる機会を学生から奪っていることになる。

それでは、自分自身のレポートを、作成開始から完成提出に至るまで、第三者の目も「加えて」書く機会をどのように教員は提供することができるのか。深谷(2001)を考察した秦(2014a)は次のように述べている。

「自己を対象化できているものを選んで掲載する。･･･オチをつけておもしろおかしく書かせる。･･･どんなに短い文章にも題をつけさせる。･･･(これらは)自分という人間を自分の外側から観察することになり、事物を冷静に見つめる態度を育て、･･･タイトルをつけさせることで話題

を焦点化する意識を養ったり、オチをつけさせることで構成を考える習慣をつけさせたりすることなどの配慮がなされ」(pp.127-8)た。

秦(2014a、pp.127-8)から分かることは、観察方法、思考、そして文章の「組み立て方」を生徒が遵守するように緩やかに制御していることである。例えば、書き言葉を用いてレポート課題の作成を学生に求めることを大学教育は自明と考える。しかしながら、これを大学 1 年生に期待することは楽観主義に基づいている。とすれば、問うべきは(a)書き言葉の習得、または(b)文章の組み立て方を根幹で支える論理的思考のそれ、いずれを最優先して教授するのかを決めることである。

なぜならば、「書きことばは、目的と結果の両側から、現実場面とは離れた抽象論や正確を要する科学的内容を不特定多数の読み手に向けて表すのにふさわしいことば」(p.129)であると同時に「『公共的文体』で抽象論や概念論を論じることは、彼ら(=生徒[筆者(来栖)が挿入])が進学する先や、やがて出て行く社会」(p.133)が求めるからである。具体論から一般論またはこの逆方向に思考できる人「財」育成に努めることが、高等教育機関たる大学が果たすべき使命の一つである。

３．処方箋

ａ．　理念

五感よりも言葉を用いたコミュニケーションは聴者(閲覧者)による発信者の相対的に適切な理解を可能とし、それが相互理解に寄与する。したがって、「書くという行為だけを続けているかぎりは、それは他者との面と向かった対話に比べれば、ずっと閉ざされた世界である」という秦(2014b、p.271)に対して [20]、「書くという行為」が「閉ざされた世界」の行為とは必ずしも言えないと筆者(来栖)は返答する。これは内向型人間の性格の最大活用を志向していることを意味する。

なお、書き言葉ではなく話し言葉を用いた文章作成を筆者は否定しない。ただし、過不足のない話し言葉を駆使した文章作成を可能にするには書き手の思考力の強化、つまり、論理的に考えることができる水準をできる限り高くすべきである。これは「書く」という訓練を継続的かつ適切に行うことが思考する能力を強化し、具体論を一般論に昇華させること(またこの逆)、またこれを可能にする的確な言葉･表現方法を身につける必要性を自覚でき、これらが学習意欲を高める。

そのさい、「書く」という訓練方法を、書く側の意向ではなく指導者が求めるルールを貫徹させることが有用である。というのは、どのような「制約条件」を経て身につけた言語運用能力なのかによって、自己理解のみならず第三者とのコミュニケーションの巧拙が生まれるからである。したがって、言語･言葉を介さずに何事も理解･思考できないことを踏まえれば、人間に備わった理解･思考する能力は、言語運用能力の強化方法如何によって、改善度合いが変わる。

そこで、言語運用能力の着実な改善が期待できる方法として、200 文字の完結/完備文を書く訓練を筆者は提唱したい [21]。書くべき内容を 5W1H の要素である What(何)、Why(なぜ)、そして How(どのように)のキーワーズで示される内容に絞り込む [22]。これらに沿った意見等を用意し、書

き手自らが 200 字以内で表現する訓練を行う。簡潔明瞭かつ的確な語彙を駆使できる言語運用能力があれば、わかりやすく説得力がある意見等を書き手は 200 文字に収めることができる。

では、なぜ長文ではなく短文(200 字)なのかという質問に対する一つの解答を考えよう。例えば、文章を読む立場に立った状況を踏まえて松岡(1994)は次のように述べている。

「文章が長くなればなるほど、テーマはぼやけがちになり、あいまいな部分や矛盾点が出てくるものです。これに対して、短い文章ならば、伝えたいことが端的に書かれているので、ちょっと目を通しただけでもポイントを理解することができます。とはいえ、あまりにも短すぎて説明不足な点も出てくるでしょう。そう考えていくと、やはり二〇〇字あたりが適当な長さ」(p.18)になるのです。

上述の「(書き手が伝えたいことを推測するための)ポイントを理解することができ」るという部分は学生が書いた文章をコメントする際に指導者が是が非でも知りたいことである。なぜならば、何か書いてあるものの、学生が読者に伝えたいことを理解･推測することが困難な(長文の)文章を読むことの方が多いからである。このような文章であるのは、書き手が読者に伝えたいことを未整理な状態で書き終えたことに起因する。松岡(1994)は次のように述べている。

「短い文章を書くという訓練は、自分が伝えたいことをはっきりとまとめておく練習にほかならないのです。･･･言いたいことが頭の中にいくつも渦を巻いてい(ても)･･･それをすべて文字にしていったら･･･収集がつかなくなります。･･･よけいなものをそぎ落として、ほんとうに言いたいことだけを残して･･･はじめて、明快な文章になるのです」(p.22)。

b. **実践例 1**

3.a に基づいて、いわゆる誘導式課題の詳説から始めたい(課題文の中にカッコつき数字･英単語を挿入し詳説する)。下記の課題 A を見てほしい。これは履修者に奇数番号[1]･[3]･[5]に関する一連の考えを、文章によって述べることを求めている。偶数番号[2]･[4]･[6]の文章は対応する前文の言い換えであると同時に、(a)どのような内容を、(b)どの順番で、(c)どの程度(詳細度/抽象度等)書くのかを指定(誘導)し、自由勝手な内容の文章を防止する縛り(制約条件)の役目を果たす。

課題 A

[1]この講義を履修した目的は何ですか(What)。[2]あなたがもっとも重要と考える目的を一つだけ述べてください。[3]なぜ、述べてくれた目的を他の目的と比較して最も重要だと考えるのですか(Why)。[4]そのように考える理由を一つだけ述べてください。[5]この講義を通じて学んだことを、どのように活用したいと考えていますか(How)。[6]いくつか考えている活用方法の中から、最も実行に移したと考えている活用方法を、できる限り具体的に述べてください。

課題 A の出題形式は最も易しいそれである。なぜならば、(a)～(c)のことを偶数番号の文章[2]･[4]･[6]を読むことで何を思考すればよいかを誘導しているからである。この形式は論理的に思考

する能力が脆弱な学生の訓練として最適である。なぜならば、(a)～(c)を決めるのに要する労力を[1]･[3]･[5]の内容の確定に注ぐことができるからである。なお、制限字数を 200 字と指定すれば、[1]･[3]･[5]の内容の表現方法を工夫する必要があり、それ故、一定の教育効果を維持できる。

課題 A の出題形式を詳説する理由は、執筆それ自体が困難なのではないことを伝えたいからである。執筆にともなう困難さの実質は少なくとも三つある。(1)執筆すべき内容が明確に絞り込むこと、(2)(1)の表現方法/手順を思考し決めること、そして(3)(2)を踏まえて、(i)制限字数を守った上でその内容を適切に表す語彙・表現が書けない場合、(ii)思いついた語彙･表現方法ではその内容を適切に表現できていないと感じ、それを打開すべく考えあぐね思考が行き詰まる場合、執筆そのものを難しいと感じる可能性が高い。以上から、(1)を無視できる場合、誘導形式の程度を加減することによって(2)と(3)の「難易度」を出題者は上げ下げでき、一定の教育効果を維持できる。

課題 B

[7]この講義を履修した目的は何ですか(What)。[8]なぜ、その目的なのですか(Why)。[9]この講義を通じて学んだことを、どのように活用したいと考えていますか(How)。以上の点を、句読点を含めて XX 字以内で述べてください。

課題 B は、課題 A と比較して、明確な誘導形式を省略している一方、執筆すべき内容を指定/制限する出題形式である。課題 B の難易度が相対的に上がっているのは[7]･[8]･[9]に関する内容の分量を制限していないものの、紙幅を指定/制限していることにある。①語彙･表現方法の適切な取捨選択を求めていること、② [7]･[8]･[9]の濃淡を思考し確定すること、③②で決めた内容を「XX 字以内」に収めること、つまり、編集作業、を新たに求めたことが難易度をさらに上げている[23)]。

課題 C

○○○(科目名)に対するあなたの期待/抱負等を、句読点を含めて XX 字以内で述べてください。

課題 C は誘導形式を完全に廃し、「期待/抱負等」という言葉に出題者の意図を凝縮して示した出題形式である。簡潔明瞭に示される課題を難易度の高いそれとみなす理由は、当該課題に対する執筆内容を含む諸事項を学生の判断に委ねる、ヒントのない課題だからである。これは明示されたテーマに関する自分の考えを構想、構成、編集し、そしてそれを的確な語彙･表現方法で書くという思考すること全般に比重がかかることを履修者にすべて求めていることを意味する。

課題 C の出題形式は、課題 A で明示された事項と(a)～(c)の適切な思考を求める少なくとも二重の負荷がかかる難易度の高いそれである。したがって、思考する力が脆弱な学生は何から思考すればよいのかを的確に決めることが困難な状況に陥ることになる。これを昨今の流行言葉で言えば、「思考停止」状態に近いそれ、つまり、思考が行き詰まった「お手上げ」状態であり、いわゆる身の丈を超えすぎた難易度の高い課題に取り組んでいることを意味する。

少なくとも課題 C への取り組みを「お手上げ」と感じる学生にとって、当該課題の取り組みから享受できる教育効果は僅少であり、百害あって一利なしに終わる可能性が高い。思考する力が脆弱な学生が受けるべき訓練は「思考する」ことに集中できる課題に取り組み、思考することの反復練習を通じて培われる「型」を身に着けることが有益である。もちろん、これは語彙･表現方法等の知識を十分に蓄えている方が相対的に享受できる教育効果が高いことも意味する。

ここで「型」とは、(1)相関語句(離れている複数の語句がセットになって一定の意味を持つ語句)や(2)構文(文法や書式)を意味する。これらを使いこなすことが可能な程度まで反復練習を行い身に着ければ、「型」に誘導されて思考することに集中できる。「話し言葉」であれば比較的無理なく執筆できる学生が講義運営の一環として課される課題の取り組みを苦手とする理由の一つは、学生の「思考する」ことを適切に誘導する「型」の不足に起因する。

例えば、福嶋(2013)は「型」を身に着けていないことが「書けない」原因になっていると指摘し、これを次のように分析している[24]。それは「書けない」ことの理由が(a)書く内容が思い浮かばないこと、つまり、何を書いていいのかわからないこと、そして(b)書く方法がわからないこと、つまり、どのように書いていいのかわからないこと、これら二つにある。(b)の改善のために「型」を身に着けることが(a)の改善にも有効である旨を次のように説明している。

「書き方･･･(を意味する)型(を身に着けること)は･･･よりどころのないまま原稿用紙に向かう･･･不安感を、消し去ってくれます。型は『文章の全体像』を与えてくれます。1 文を書いても、2 文めを考えなければならない･･･(といった)手探り状態･･･(から)抜け出せます。･･･型があればこそ、そこに存在しなかった『内容』が、生み出されるのです」(pp.41-42)。

それでは、上述の「型」をどのように考えるのか[25]。どのような文章の書き方を「型」として講義し、学生に身に着けてもらうべく文章作成の訓練を課すのか。大学が設定したディプロマ･ポリシーに鑑み、①明示した講義方針に則った講義項目に沿って学生を教育指導し、②どのような人財として社会に送り出したいのかということが明定され、かつこれらが③教員間で適切に共有されているならば、少なくとも一定水準の能力を保持している人財を社会に輩出できるだろう。

c. 実践例 2

3.b を前提とした上で、今度は専門基礎科目や専門科目を意識した類題を考えよう。課題 E は講義内容を覚える(=暗記する)ことではなく、理解することを奨励する出題形式である。講義内容を一言一句再現するのでなく、キーワードをいくつか指定したゆるやかな誘導式とし、講義内容の「流れ」の理解が先決であることを学生に実感してもらう必要がある。したがって、本筋ではない理解不足･誤り等には寛容であることが大学教育に対する受講態度の改善に有益である。

課題 D

本日の講義内容を下記の用語を用いて XX 字以内で要約しなさい。なお、右記の用語を少なくとも一回使用し、初出の用語に下線を引きなさい。[○△、△△、■□]

他方、○○理論の理解を求めた下記の課題 E は、何をどのように書くのかを具体的に指定しており、課題 D よりも難易度が高い。この出題形式をとる課題は、一般的に、最重要項目を限定し、その要点の正確な理解とその要約する力の養成を志向して作題される。なお、学生の理解度を評価するには、○○理論の言い換え(説明)を求めることも有益である。そのさい、この出題形式の

課題が比較的長文になることを踏まえ、接続詞等を用いて論理展開を誘導することが有益である。

課題 E

○○理論について下記の①～⑤に適切な文章を記入し本日の講義内容を要約しなさい。句読点を含めて①は XX 字以内、②は YY 字、③は ZZ 字、④では XY 字、⑤は YZ 字ある。
○○理論は[　①　]を説明するために主張された考え方である。○○理論が提唱されるまで、[　②　]の[　③　]を説明できなかった。ただし、○○理論に基づいた場合、[　④　]を説明することができない。これは[　⑤　]ということである。

課題 F

下記の⑥～⑪に適切な文章を記入し本日の講義内容(○○理論)を要約しなさい。句読点を含めて⑥は XX 字以内、⑦は数字を、⑧は ZZ 字以内、⑨では XY 字以内、⑩は YZ 字以内、そして⑪は XZ 字以内である。
○○理論は[　⑥　]を説明するために主張された考え方である。○○理論の主な特徴は[　⑦　]個である。一つ目は[　⑧　]でる。これは[　⑨　]を意味する。二つ目は、[　⑩　]である。これは[　⑪　]ということである。‥‥。

課題 E の①～⑤は専門用語（単語）ではなく講義内容を、指定された文字数に要約することを学生に求めている。そのさい、講義内容に関する学生の理解度が明確に評価できるように、番号毎に指定した文字数からなる原稿用紙を作成する。これは講義内容の理解とそれを適切に表す表現方法を取捨選択した上で執筆することを求め、学生の論理的に思考する能力改善を志向する。というのは、字数制限等の制約条件のない課題は実質的な教育効果を学生に提供しないからである。

課題 F の⑥～⑪は課題 E の出題意図を共有するものの、出題例である「○○理論」の特徴の理解度の評価に特化した出題形式の課題である。当該出題形式はいくつかの特徴を簡潔明瞭に要約する能力とそれを言い換える能力(説明力)とを併せて評価するとともに、かかる能力強化を志向する。なお、いわゆる「列挙型」の出題形式は書きやすい、理解しやすい事項から学生が先に執筆する傾向にあるため、復習事項の厳選とその説明方法を考えるヒントを得ることができる。

最後に、学生の価値判断（例えば、賛否）を問う出題形式の課題例を提示しよう。一般に、物事の白黒をその根拠と併せて明示することを得意とする人はそれほど多くない。この理由の一つとして、何事も理路整然と説明できない不完備な部分が少なからずあり、そのことを先回りして気づいてしまうことが、物事の白黒を明確につけることを躊躇させるものと思われる。この躊躇が学生の論理的に思考する能力の改善意欲を弱めていると筆者は考えている。

学生の価値判断を明示する思考を妨げる「躊躇」問題を回避するには、①価値判断の明示、②最も説得力ある根拠･論拠の厳選、そして③制限字数を守った上で過不足なく執筆する言葉･表現方法の工夫、これら一連の思考を反復練習によって身に着けることが有効である。そのさい、学生自身の思考を的確に表す書き言葉や事例をスマートフォンの活用によって検索することを奨励する、というのは、このような活用方法を大半の学生が知らないし実践しないからである[26]。

課題 G は根拠を一つ明示しながら「○○理論の有効性」の賛否の表明を問う課題の出題例である。なお、根拠を複数求めるのであれば、⑭と⑮のペアを複数設定すればよい。⑫を選択した学

生の価値判断（賛否）の根拠の数を⑬で示し、その内容を⑭で簡潔明瞭に述べ、⑮は⑭の言い換え、つまり、説明・解説を求める。次に、学生の価値判断を裏付ける証拠・事例の簡潔明瞭な表記を⑯、その説明・解説を⑰で求めることで、当該学生の講義内容の理解を評価できるようにした。

課題 G

(＊＊＊を説明する)〇〇理論の有効性に関するあなたの立場(賛成/反対)を、根拠とそれを裏付ける事例を示しながら論述しなさい。
私は〇〇理論の有効性を[　⑫　]する。この根拠は[　⑬　]ある。まず、[　⑭　]である。これは[　⑮　]を意味する。これを裏付ける事例は[　⑯　]である。これは[　⑰　]である。この事例が私の主張を裏付けると考える理由は[　⑱　]である。これは[　⑲　]ということである。

課題 H

(＊＊＊を説明する)〇〇理論の有効性に関するあなたの立場(賛成/反対)を、根拠とそれを裏付ける事例を示しながら論述しなさい。なお、〇〇理論では説明できない事例を、そのように考える理由とともに指摘しなさい。
私は〇〇理論の有効性を[　a　]する。この根拠は[　b　]ある。まず、[　c　]である。これは[　d　]を意味する。これを裏付ける事例は[　e　]である。これは[　f　]である。この事例が私の主張を裏付けると考える理由は[　g　]である。これは[　h　]ということである。なお、[　i　]という事例は〇〇理論に基づいて説明することが困難である。これは[　j　]ということである。事例 i を〇〇理論に基づいて説明することが困難と考える理由は[　k　]である。これは[　m　]ということである。

課題 H は学生の価値判断を明示する思考を妨げる「躊躇」問題の回避に加え、不完備な部分を少なからずもつ物事をバランスよく理解しているか否かを問う出題例である。i~m を課題に加えることによって、「〇〇理論の有効性」の限界と学生が判断する事項の指摘も求めることになる。これは学生自らの価値判断によって選択した立場(a~h)の思考とそれ以外の立場(i~m)も併せてバランスよく理解できる思考を当該学生がどの程度できるのかという点を総合的に評価できる。

Ⅵ. まとめ

SNS の最善な活用によってキャリア形成を成就したウイッカー(2020)をヒントに、200 字程度の短文作成の反復練習が学生の論理的に思考する能力養成に有用であることを本稿は論じた。文字制限という制約条件は過酷な精神状態での自問自答を必然とし、これが論理的に思考する能力改善に資する。そのさい、思考すべき内容を学生の一度しかない人生設計に関連するそれにすれば、そうでない場合と比較して、自分のためにその詳細を自力で描く能力の顕著な改善が期待できる。

この人生設計を自力で描くことの重要性を、大学教育が提供する教育効果の何をどのように享受するのかという「学ぶ目的や意義」を学生自らが気づき、それに基づく主体的な学びへと転化していくことへの期待として指摘できる。(1)人生設計の方向を明確にした上での学習意欲を喚起する新入生教育、(2)人生設計に基づく履修すべき専門科目の決定、そして(3)自己分析と業界研究へと自問自答する問とその出題形式を工夫した多種多様な大学教育を受講する機会を提供できる。

しかしながら、SNS を直接間接教育ツールとして活用することに対する不安を抱かせる報道を最近目にした[27]。それは SNS を通じて公開されている情報を利用して、その作成者である個人の価値観や性格等を正確に解析できる目途がついたとする内容である。この技術革新に対して、この手の懸念の完全払拭が不可能であることを前提に、コミュニケーション･ツールとして SNS を活用することを教授するマナー教育の充実は賢明な作成者の育成に寄与するだろう。

それ以上に、SNS を通じた公開情報を第三者が解析し、その作成者の人柄等を精確に再現できる場合、この事実は別の意味を持つ。それは(i)当該作成者の論理的に思考する能力が卓越していることの証左であること、(ii)論理的に思考できる能力を大学教育の受講によって改善でき、かつ(iii)それを的確に自己分析･表現ができる人財に育成できたことである。これらの教育効果は、表面的な職業訓練教育が提供することが困難な、汎用性の高い能力の持ち主の輩出を担保する。

［付記］本稿を作成するにあたり、三名の匿名原稿確認者(流通科学大学)から有益な示唆を得た。この場を借りて感謝申し上げる。

＜引用文献・参考文献＞

1) カレン・ウイッカー（安藤貴子訳）、2020、『つきあいが苦手な人のためのネットワーク術』、CCC メディアハウス。

2) 秦　千依、2014a、「『カキナーレ』−二つの実践と考察−」、pp.126-133、中洌(2014)所収。

3) 「ネットワーク」をウイッカー(2020)は人間関係の意味に使用している。

4) 各段落末尾のマル括弧に記載の第＊章はウイッカー(2020)の該当章の要約である。これを日本語訳（訳書）に基づいて行ったため、当該書籍の書誌データを引用した［注 1 を参照］。加えて、注 5)〜17)をウイッカー(2020)の適切な理解に資することを期待して著者（来栖）が付したものであり、翻訳者や原著者のそれらではない。

5) ギグ・エコノミー（Gig Economy）とは、インターネットを通じて単発の業務を依頼・受注し、それによって流通する流動性を含めた経済形態を総称する。例えば、次を参照されたい。村主知久・桐山大地、2020、「日本におけるギグ・エコノミーの行方と実務的考察」、『NBL』、1164 号、pp.26-33。

6) Granovetter, M.S., 1973, The Strength of Weak Ties, *American Journal of Sociology* 78, pp.1360-1380.

7) Handley, A., 2018, How Do You Balance Your Personal and Professional Social Media Presence?, Downloaded on the 26th of August, 2020. https://annhandley.com/balance-personal-professional-social-presence/

8) Sreenivasan, S., 2017, How to Use Social Media in Your Career, *The New York Times*, (November 8, 2017. Downloaded on the 26th of August, 2020. https://www.nytimes.com/guides/business/social-media-for-career-and-business

9) Carr, D., 2010, Why Twitter Will Endure, *The New York Times*, (January 1, 2010). Downloaded on the 25th of August, 2020.https://www.nytimes.com/2010/01/03/weekinreview/03carr.html#:~:text=%E2%80%9CIt%20will%20be%20hard%20to,is%20important%20by%20what%20Mr.

10) 本稿の目的を勘案し、著者が言及したインスグラムの内容を割愛した。

11) ロムラーとは、ROM(Read Only Memory[読み取り専用の記憶素子])をもじった略語 ROM(Read Only Member)の表記であり、各種ソーシャル・メディアの投稿文を閲覧するだけの人のことを意味する。

12) Dishman, L., 2017, The Business Etiquette Guide to Emojis, *Fast Company*,(July 14, 2016). Downloaded on the 26th of August, 2020. https://www.fastcompany.com/3061807/the-business-etiquette-guide-to-emojis.

13) Peters, T., 1997, The Brand Called You, *Fast Company*, (August/September 1997). Downloaded on the 25th of August, 2020. https://www.fastcompany.com/28905/brand-called-you

14) Madrigai, A., 2014, Email is still the Best Thing on the Internet, *The Atlantic*, (August 14, 2014). Downloaded on the 26th of August, 2020. https://www.theatlantic.com/technology/archive/2014/08/why-email-will-never-die/375973/

15) Graham, R., 2016, In Defence of Small talk, *Slate*, (February 25, 2016). Downloaded on the 26th of August, 2020. https://slate.com/human-interest/2016/02/stop-dismissing-small-talk-as-shallow-or-boring-its-a-crucial-social-lubricant.html

16) メンターン(mentern)とは、新たなスキルを学ぶ立場を意味するインターンと他の人を指導する立場を意味するメンター(mentor)、これらを兼ねる役割を果たす人を意味する造語である。

17) 自信格差とは、能力不足を心配し、過剰までに準備に費やす傾向が強い女性の価値観を、他方、実力を過大評価する傾向が男性にある現象を称する。例えば次を参照されたい。アレン琴子、2018、「男女所得格差の原因は『自信格差』？男性は IQ を過大評価、女性は過小評価」、ZUU online、(2018 年 5 月 17 日)。2020 年 8 月 27 日入手。https://zuuonline.com/archives/185147

18) 秦(2014a)、前掲稿。
中洌正堯、2014、『高校国語実践の省察と展望』、三省堂。
深谷純一、2001、『カキナーレ-女子高生は表現する』、東方出版。

19) 以下、特段の断りがない限り、(p.XX)は秦(2014a)の引用であることを示す。

20) 秦　千依、2014b、「文体的特徴に基づく作文指導」、pp.244-271、中洌(2014)所収。

21) 以下の私論は松岡(1994)に依拠している。したがって、以下、特段の断りがない限り、(p.XX)は松岡(1994)の引用であることを示す。松岡由綺雄、1994、『読ませる二〇〇字文章の書き方』、ごま書房。

22) 200 文字に収める文章は完結/完備した文章でなければならない。そこで、①What(何)に該当する事項は、例えば、どのように考えるか(What do you think about?)、何を提案するか？(What do you suggest?)等の質問を想定し、これに答えるべく自分の意見を文章にする。次に、②Why(なぜ)は①に対する理由・根拠を問う質問を想定し、これに答えるべく自分の意見を文章にする。そして、③How(どのように)は、例えば、(How can you support your ideas?)といった①②を裏付けるきっかけやエピソードを説明する文章、(How do you plan/do?)といった提案/計画/実施を問う質問を想定し、これに答えるべく自分の意見を文章にする。少なくともこれら三つの事項に関する意見・考えを準備しておけば、これらの内容が異なるものをそれぞれ複数用意することで詳細な文章(長文のレポートや卒業論文)を作成することができる。

23) 字数制限の表記を、便宜上、「･･･字以内」としている。もちろん、「･･･字以上･･･字以内」と指定することは、他の事項を所与とすれば、難易度を上げることになり、教育効果をさらに高くすると期待される。

24) 福嶋隆史、2013、『“ふくしま式 200 字メソッド”で『書く力』は驚くほど伸びる！』、大和出版。以下、特段の断りがない限り、(p.XX)は福嶋(2013)の引用であることを示す。

25) 「型」の一例を福嶋(2013)は第 2 章以降に示している。

26) このような現象が生じるのはスマートフォンを用いて「情報消費」を行うことに関する教員と学生との間に認識ギャップが生じていることに起因する。例えば、教員は講義時間中に講義内容の理解に役立つこと以外のことに意識を向け、それを態度に表すことを失礼と考える価値観に基づいて、講義に出席している学生に講義内容の理解に集中する態度を少なくともとることを、自明のこととして、求める。これは、他の事項を所与とすれば、講義に出席している学生が主体的に情報収集し、これらを知識・知恵として蓄積することを教員が期待していること(講義内容の傾聴とその記録の実行)を示唆する(ストックとしての情報消費)。

しかしながら、教員の期待とは裏腹に、学生の大半はスマートフォンをコミュニケーションの質を高めるためのツールと考えている可能性が極めて低い。例えば、理解できない言葉を見聞しても、その場でスマートフォンを使って当該言葉の意味を主体的に調べるといったことをまったくしない。これはストックとしての情報消費を行う価値観が稀薄である可能性を示唆する。ただし、情報収集ツールとしてスマートフォンを利活用し、入手した情報を瞬時に消費することを日常茶飯事に学生は行っている。例えば、ネットサーフィンやゲームに時間を費やすことである(フローとしての情報消費)。

情報消費に関する両者の認識ギャップを前提とすれば、「フローとしての情報消費」のツールとしてスマートフォンを用いるという規範をもつ学生が「ストックとしての情報消費」のためにそれを主体的に利活用する可能性を期待することは極めて困難である。例えば、講義時間中に筆者がスマートフォンを使って言葉を調べるように促した時、この要望の意味を即座に理解することができない印象を筆者は幾度となく持った。もちろん、講義に出席している以上、出席者たる学生である「私」が行うべきことが講義内容を理解することが主であり、これ以外のことが従(または厳禁である)という規範をすでに持っており、それに基づいて講義内容の理解とは異なる「行動」の選択を躊躇している可能性を筆者は理解している。とはいえ、この可能性を所与としても、スマートフォンを「ストックとしての情報消費」のツールとして利活用することが「できる」という価値観形成の機会を学生がほとんど持つことがなかったものと筆者は推察する。

とすれば、講義時間中に教員がスマートフォンを使って言葉等の意味を調べるように促す場合であっても、つまり、講義時間中に「主」であることに代わって「従」であることを学生が主体的に行うことを教員が「許可」しても、今までの人生を過ごす過程で培ってきた規範がスマートフォンを「ストックとしての情報消費」のツールとして利活用することに違和感を学生に覚えさせる。その結果、教員の要望、つまり、許可されたことであるにも関わらず、「ストックとしての情報消費」のツールとしてスマートフォンを利活用する行動に即座に移すことに戸惑いまたは罪悪感を抱くのではないかと筆者は述懐する。

27) 大越優樹、2020、「SNS から内面見抜く」、『日本経済新聞（朝刊）』、（2020 年 8 月 30 日）、p.26。
国立研究開発法人情報通信研究機構、「SNS の情報から IQ や外向性など幅広いパーソナリティーの推定に成功」、（2020 年 8 月 20 日）。2020 年 8 月 31 日入手。https://www.nict.go.jp/press/2020/08/20-1.html
Mori, K. and M. Haruno, 2020, Differential Ability of Network and Natural Language Information on Social Media to Predict Interpersonal and Mental Health Traits, *Journal of Personality*, 2020; 00:1-16. 2020 年 8 月 31 日入手。
https:// doi.org/10.1111/jopy.12578